

たぐみ

Craftsmanship

特集 民藝同人作家

「書・型・版・筆彩の美」展

第30号

掛け軸の愉しさ

昨年師走のころ、美術商M洞の〇さんからお正月に飾るのにかがですかと浅川伯教のたかの掛け軸一幅が届けられた。

拝見すると掛け物の上下と中縁(ちゆうべり)はいずれも揉み紙を用い、風帯は白紙、軸頭は胡麻竹という茶掛仕立である。一文字には白地金欄を用いてわずかに華やぎをそえている。

本紙の中央に描かれた李朝風の大壺には波間に昇る旭日と鳴三羽が一面を彩り、右上には「春」という字が篆書体で書かれている。いかにも新春にふさわしい一幅であった。浅川伯教は弟の巧とともに植民地時代の朝鮮に住んで、朝鮮の文化を研究し、かのくにの人びととの融和に一生を捧げたが、また柳宗悦との親交でも知られた。

もうひとつ、たぐみで新春から飾った掛け物を紹介しよう。それは栃木県益子の異色の画家であり、陶芸家とし

ても知られた合田好道の作品である。

画題は「南瓜の花」で、パステルで描かれている。氏は戦後の昭和二十一年、濱田庄司を頼って益子に移り、たくみの益子焼の仕入を担当しながら円道寺窯で作陶や文様指導に励んだ。

この作品が益子での比較的初期の作と思われるのは、本紙の中央上部に「人民」の印があることによる。反骨精神旺盛であった合田さんは、血気盛んな若者たちと反戦平和の運動に真剣に取り組まれた時期があったのである。

表具は上下、中縁とも藍染めの木綿でややムラがある。一文字、風帯はななく軸頭は竹。いわゆる袋表具である。

わが国は、かつて平安時代や桃山時代に唐や南蛮の文化を取り入れながらも独自の国風、和風の文化の華を咲かせた。暮らしがすっかり洋風になった今日でも、日本人の感性にはほんとは和風のものに似合っているのではないか。そう思いつつ掛け物を眺めるのである。

(志賀直邦)

たくみ特別展

民藝同人作家

「書・型・版・筆彩の美」展

会 期 平成十九年三月二十四日(土)～四月四日(水)

三月二十五日(日)、四月一日(日)は営業いたしません。

会 場 銀座たくみ二階ギャラリーI

営業時間 十一時から十九時まで

(日祝日・最終日は十七時半まで)

【展示・販売の品目】

屏風、掛け軸、額装、のれん、拓本、装丁、大津絵、
李朝民画

【出品作家】

柳 宗悦、バーナード・リーチ、芹沢銈介、棟方志功
川上 澄生、外村吉之介、鈴木繁男、小島恵次郎、
岡村吉右衛門、柚木沙弥郎、渡辺禎雄、山下 清ほか
ウイリアム・モーリスの壁紙など

昭和十一年十月の日本民藝館の開館
のおり、一階広間の左右の壁面に芹沢
銈介の「絵本どんきほうて」や棟方志
功の「華嚴譜」が飾られたことは注目
されます。

生活のなかの美、用の美の殿堂とし
ての日本民藝館で、平面的な造形表現
の仕事は、大津絵、丹緑絵本、李朝民
画、泥絵など当初から広く蒐集され、
現代の作者にとつても規範となってい
ます。

また今回出品される芹沢、鈴木両氏
による「工藝」誌の表紙の仕事も比類
のないものです。毎月八百冊におよぶ
表紙の装丁は、型染め、あるいは漆絵
によりすべて手作業で制作され、作品
としても独自の美しさをもっています。

その他にも珍しいものもあり、お楽
しみいただける会と思えます。どうぞ
ご覧ください。



柳宗悦「踏マレツモ」軸装



合田好道「南瓜の花」



浅川伯教掛軸



芹沢銈介「いろいろの図」



渡辺禎雄「東方の博士たち」



山下清 筆彩絵



大津絵「座頭」



鈴木繁男「工藝百号表紙」



鈴木繁男「工藝」九十号表紙



芹沢銈介「よろず模様」



川上澄生「身の品々」



長谷川富三郎「雪国の人びと」版画



岡村吉右衛門「藁山と狐」 芹沢銈介「クリスマスカード」

大津絵「藤娘」



小島恵次郎「南部の農家」



ウィリアム・モーリス染紙「花と小鳥」



柚木沙弥郎「子供」

虎尾政治の硯箱

笠間 達男

平成十八年十二月に恒例の「たくみ特別展」があった。展示作品を手にとつて見る事ができるので、私は年何回か行われる特別展を毎回楽しみにして出かける。



鳥取木工の硯箱

年頭の日記に「今年は終わりの始まり。身辺の整理」という年度の目標を書き込んだ。学術書は退職する際に研究室の本を一冊残らず処分した。初夏の頃、家にあった本の九十五%をまとめて古書市で処分した。また、知らない間に貯まった絵画も欲しいと言った知人に差し上げ、残りは知り合いのギヤラリーに頼んで美術商協会の市に出して順次処分している。

たくみとの縁も五十年を超え、民芸品も貯まったが、ほとんど日用品である。いわゆる巨匠の作品は今回のような展示会で見るだけになっている。

しかし、今度の展示で、硯箱(写真)を購入した。たて二十二cm、横十cm、厚さ三cm拭漆塗というケヤキ材の

小柄の作品である。私は数年来、日課に般若心経を写経していて、適当な大きさの硯箱を探しているの、物を増やさないと禁忌を忘れて購入し、翌日から使用している。

上蓋には写真に見るような連続模様が彫られ、上蓋を開けると上蓋の裏側と下板には硯、水滴、墨、筆がはめ込まれるスペースが彫り込まれている。

無銘の職人仕事だが志賀さんは「これは虎尾政治の仕事ではないか」という。とすれば、硯は吉田璋也が再興し、柳宗悦も愛用した因州諸鹿(現・若桜町)硯、水滴は吉田が新作品を多く注文した牛の戸窯となれば首尾が整うが、まだ調べてはいない。

虎尾については柳宗悦「吉田君の進み方」(『吉田璋也―民芸のプロデュウサー』鳥取民芸協会編・所収)には「最初木工の仕事を引き受けたのは虎尾政治であった」とある。また、

同書に河井寛次郎が虎尾に作らせた複製の大黒天を終生愛玩していたと書かれている。吉田が昭和六年に京都・東京で企画推進した「山陰新作芸展」の木工部に虎尾は出品している。

耳鼻科の医師吉田璋也（一八九八～一九七二）は大正九年（一九二〇）に新潟医専の同級生式場隆三郎と共に我孫子の柳宗悦を訪れ、柳に啓発されて初期の民藝運動に参加した。

展示会予告

大塚茂夫、和田安雄、島岡龍太、作陶三人展

会期 四月二十一日(水)～二十六日(月)

会場 たくみ二階サロン

益子の異才の陶芸家、合田好道の門下三人による、たくみでは久しぶりの作陶展です。合田さんはもとも画家でしたが、書も能くし、陶芸の模様では益子に革新の風を吹かせました。

その合田さんの直弟子としては和田さんの作風はおだやかで、それだけに使い易く生活によくなじむのです。

大塚さんは新しいものにもいつも挑戦しながら、作風は益子の本流です。龍太さんもまた当初からの龍太流を崩しません。いつも龍太らしく工夫をこらし愛好家をうならせませす。

三人三様の作風でありながら合田さんを心から慕い、それぞれが受けた種を育てています。彼らの作品はお互いに調和しあい、食卓のよき友となるでしょう。

昭和六年、故郷鳥取に病院を開業した吉田が、柳宗悦が名付け親の「たくみ工藝店」を鳥取市に開店したのは昭和七年（一九三二）六月で、「たくみ工藝店東京支店」（現「たくみ」）は翌年十二月十六日に開店した。

虎尾はこの頃活躍した木工家である。読者に虎尾政治についての情報があれば教えていただきたい。

閑話休題、我が家の今晚の献立はしやぶしやぶである。終戦で帰国した吉田は、昭和二十一年（一九四六）、京都で医院を開業し、北京で覚えた羊肉すずぎ鍋をもとに京都十二段家で牛肉のすずぎ鍋をはじめさせたのがしやぶしやぶの始めだという。吉田は鳥取の「たくみ割烹店」で「肉のすずぎ鍋」と称したが、大阪の肉料理店スエヒロが「しやぶしやぶ」と命名し、それが普及したと言われる。

（東京民藝協会会員）

芹沢銈介頌

大正のはじめ、画家を志した芹沢銈介は、雑誌「白樺」を通じて西欧の文学や絵画に若き情熱を燃やし、国内ではとくに岸田劉生、中川一政、富本憲吉やバーナード・リーチの作品に強く惹かれた。その後、健やかであるべき工芸品が、美術へ逃避する退嬰的な

風潮をきびしく批判した柳宗悦は、人の暮らしを高く豊かにする日常の雑器にこそ美が宿ると、実物を示しながら新たな工芸論を展開した。的確にして明快な柳の論旨にふれて、新鮮な感動を覚えた芹沢銈介は、工芸に己の進む道ありと信じ、胸は大きくふくらむ。郷里静岡で、伝統の和染めにとり組む工人たちの確かな仕事に学び、昭和三年ご大典記念博覧会に沖縄県出品の



染絵 松竹梅つなぎ

紅型の色と模様
の美しさに心打たれて目を開き、その心と業をうけとめて、型染こそ一生を託すに足る仕事との信念をもつ。

爾来、柳宗悦を深く信じて師と仰ぎ、彼の収集品を陳列する日本民藝館を中心に、展開された民藝運動にも力を尽くす。柳もまた芹沢の卓越した観察眼と描写力から生まれた模様を当代随一と見抜いた。柳の主張や思想に共鳴した、陶工の河井寛次郎と濱田庄司、板画の棟方志功、木工の黒田辰秋らと共に二十世紀を代表する作家として大成し、幾多の秀作を残す。芹沢銈介は、制約の多い型染めの技法を用い、豊かな表現力に天賦の造形感覚が加わって、獨創性に満ちた模様の世界を拓く。着物、屏風、のれん、額、軸、絵本など伝統の様式によりながらも変化に富んだ作風は世に「セリザワ模様」と称されるほど工芸の本質を純粹な形で具現した。その道を装丁や挿絵など数多くのグラフィック・デザインにも及ぼす。さらに家具、どんちょう、ステンド・グラスから建築にいたる広い領域にまで仕事を進め、ついに他の追隨し得ない高みへと到達した。

華麗にして莊重さに満ち、芳醇にして馥郁と香る芹沢作品は、人々の目を輝かせ心を和め、豊かさに胸の高鳴りを覚えさせるが故に、国内はもとより海外にまで愛好者の輪を広めた。パリ国立近代美術館館長のジャン・レマリ―氏は来日し、透徹した目で芹沢作品に迫り、「超俗にして簡素な東洋美」と讚え、昭和五十一年『芹沢銈介パリ展』を企画し、日本人としては初のグ



梵字

ラン・パレでの展観を実現した。藍地に白く染め抜いた“風”の字のポスト―に誘われて訪れた万余に及ぶ異邦の人々に深い感動を与え、専門家の間からは「沈滞するフランス美術界に新鮮な刺激を与う」との高い賛辞が贈られた。

若き日、東北の小絵馬に魅せられて始まった収集品は、やがて洋の東西南北に及び、人々の日々の営みに合わせ

る静岡市立芹沢啓介美術館が開設され、昭和五十八年にはその全貌を総覧し得る『芹沢銈介全集』三十一巻（中央公論社）が完成する。

作家がその在世中に美術館と全集の完成を目のあたりに成し得たのもまさに“芹沢”ならではの未曾有のことといえよう。

彼の描く絵や文字はのびやかにして清々しい。だが静寂もあれば、時には乱舞に似たものもある。その末期には、靈界への道を往きつ戻りつしたかと思像させる流麗な字模様をしたため、この世に美しい染めの世界を残しながら、昭和五十九年四月五日弥陀の浄土へと旅立ったのである。今、静かに芹沢作品への関心が澎湃と湧きあがっている。

財団法人アジア民族造形館理事長
アジア民族造形文化研究所長

金子量重

昭和五十六年、作品とコレクションを同時に展示す

（静岡市立芹沢銈介美術館特別室に掲示）



昭和10年12月号

「たくみ」をめぐる座談会(二) たくみの将来

浅沼 お客様の中には、店の品物が以前柳さんが歩いて集めて来られた時よりも落ちていると批評される方が間々ありますが、これについてはいい方法はないでしょうか。

比木 それは主に昔ながらの民藝のものについて言われるのでしよう。時世の変遷によって昔からの民藝品の悪くなるのは止むを得ない。それにしても全体としての民藝運動は素晴らしい発展をとげていると思う。例えば船木道忠君を例にあげても、どれくらい進歩を示したのか。その他益子でも、牛戸でも、袖師でも、酒津でも、今日の

出席者

柳 悦孝氏

山本龍蔵氏

比木 喬氏

芹澤銈介氏

浅沼喜美

鈴木訓治

十月二十九日夜 山茶寮

吾々の日常に使える品がどんなに豊富に、そして上手に作れるようになったか。昔ながらのもので、直にこちらが選ぶことも出来ず、指導することも出来ないものが、時勢につれて質が落ちるのは致し方ない。いつまでも昔のものにこびりつかないで、新作運動のこの素晴らしい力、素晴らしい発展を見てくださいとお客様に言うよりほかはない。

浅沼 確かにそうです。この上美術館が出来ればどんなに新作がのびるか楽しみです。

比木 それから「たくみ」は品物もふえ、飾りつけも芹沢さんや悦孝さんのご尽力でよくなり、値段も安くなったが、これが果してどの程度まで発展す

るか、という点をどう考えますか。果して全部の人々にまで行わたるかどうか。それは理想であるが、今日では困難だと思われます。到底全国津々浦々の下層階級にまでこれがすぐ行きわたることは出来ないでしょう。だから「たくみ」としては、まずインテリ階級の正しい趣味をつかむことを目標とすべきだ。デパートで扱うもの、機械でどしどし作るものはなるほど普及力はあるが、それだけでは満足しきれない何かを感じて人がだんだん多くなるだろうし、そうした人達を「たくみ」で満足さすようにするのが「たくみ」の存在理由なのだが、僕は「たくみ」こそ今日のインテリ階級に対して濱田さんのいわゆる「新茶道」を満足させ、その開拓者となる店であると考えています。だがこの限度においても、果して「たくみ」は十分人をつかんでいるか。おそらく否であろう。それは、残るところ宣伝不足のせいだと思ふ。



昭和15年頃のたくみの店内

山本 その点で、外人方面、殊に観光客への宣伝を考えてほしいと思う。

浅沼 軽井沢の経験から、確かに外人に喜ばれるものが多いという自信はあるので、目下その準備もしています。が、何よりも肝要なことは、一度民藝に感心を持った人、一度店に来、店の品物を買った人、その人達を永く店に引き寄せることだと思つたのです。そのため「工藝」や民藝展で紹介された品物は

極力続けて集めています。月報もその目的で出しているのです。今でも「たくみ」は高いと言われる方もあるようですが、それは昔の記憶か、使い心地や品物のもちのよさを考慮しないでの比較でそう言われるのだと思つたが、出来るだけ値も下げ、また仕入方も、安くて喜ばれそうなものを仕入れるようにしています。我々が口で説明するよりも品物自身に語らせようと思

い、品物が語りいいように陳列も心しています。最近では学生方面にも相当愛好者がふえましたし、各地方の工人達も店を信用し、店の方針に積極的に協力してくれますので、きつとよくなることと思つています。

*

私共の仕入方針は成功しています。前号に予告した酒津窯、袖師窯、布志名窯

のものも到着、中でも酒津の鉢は好評です。

先月下旬の染織展、今月中旬の新春冬向陶器の会、いずれも大成功を収めました。染織品は直ちに補充、会の時以上の充実ぶりです。もう一度、見に来て頂きたく思っています。

陶器の会には、柳先生の東北ご旅行のお土産の一部が間に合い、思いもつけぬ幸せをいたしました。山形の爐鍵、五徳、鈴、灰均し、鶴岡の塗物、茶舟、秋田の籠、岩手の栗下駄、箆などで、その後来るはずのものに山形の徳利袴、酒田の浜弁当、箱膳、鶴岡の蒲製深靴などがあります。会で売り切れたものもそれぞれ追注文を出しました。歳末贈答用に恰好と思われるものも手配してあります。相当珍しいものもまいます。

なお別項予告の通り、武州小川の和紙の会を催します。かつて細川紙で鳴らした小川の和紙が、どんな方向に活

路を求めたか、ご期待いただきたいものです。小川和紙振興会を指導する永松技師は、今春まで鳥取にあつて古代因幡紙の再興に努められた人(工藝十号参照)、それに民藝協会から芹沢氏が加わられ、それは一方ならぬ力の入れようでした。短日月の美事な成果もさもありなん次第です。

ご参考までに主な在庫品目録を揚げます。(単位は円)

・陶器

- 花瓶…○・六五―八・〇〇
- ジョッキ…○・五〇―一・八〇
- 皿組…一・二〇より
- 火鉢…一・五〇より
- 菓子鉢…一・三〇―一五・〇〇
- 徳利…○・五〇より
- 盃…○・二〇より
- 飯茶碗…○・五〇より
- 灰皿…○・三〇より
- 湯呑み…○・一五より

番茶セット…一・五〇より

ミルク注ぎ…○・五〇より

土瓶…○・二五より

小壺…○・四〇より

水甕…一・〇〇より

爛瓶…○・三五より

コーヒー紅茶セット 三・五〇より

丼…○・三〇より

片口…○・一〇―一〇・七〇

ゆきひら…○・二三より

火消壺…○・六〇

七厘…○・五〇

焙烙…○・一三より

向付…○・二〇より

蓋物…○・四〇より以下略

・染織

シヨール…六・〇〇―一六・〇〇

草履…二・五〇―三・五〇

ハンドバッグ…三・〇〇―五・〇〇

ネクタイ…一・三〇―三・〇〇

風呂敷…一・五〇より

木綿…反五・〇〇―一六・〇〇

半袖…短九・〇〇

黄八丈…反一三・〇〇―一五・〇〇

帯地…四・〇〇より

袴地…一八・〇〇より

帯紐…一・〇〇より

テーブルセンター 一・五〇より

タオル…○・三〇より

ナプキン…半打一・〇〇以下略

・木工

茶托…組一・八〇―一五・六〇

運び盆…四・〇〇―五・五〇

盆…一・三〇より

電灯セード…八・〇〇―一〇・〇〇

電気スタンド…一〇・〇〇―一六・〇〇

状差し…一・八〇―三・〇〇

脇息…四・〇〇―一六・五〇

椀…○・三〇より以下略

・金工

瓶掛…一・二五―二・〇〇

鉄瓶…二・五〇―三・五〇

灰均し…○・六〇より

火箸…○・七〇より以下略

母と亀の子たわし

吉本 力

昭和十九年七月、父にも召集令状が来て、母は、私たち子供三人を育てながら、心齋橋の店を切り盛りしていかなくてはならなくなった。その時、姉六才二カ月、私三才十一カ月、妹一才六ヶ月だった。大阪も空襲の危険にさらされ、"幼い子供たちを抱えていては危ない"ということになり、姉と私は、岡山市内の母の実家に預けられることになった。

大阪の家が、空襲で焼失した後、岡山も空襲に遇い、金光へ移り、そこで終戦を迎えた。私は、伯父や伯母とともに岡山へ戻り、小学校入学直前まで、岡山の育った。伯父や伯母は、殊の外、私のことを可愛がってくれたが、同時によくしつけてくれて、よい習慣が身についた。金光教の教会であったから、自然と神前に拝礼することを覚えた。父や母は、夫婦の交わりの時にも、

「どうか、達者で、よく信心をして、将来世の中のお役に立つ人間になる子をお授けください」と、祈ったそうだから、神前に手を合わすわが子の姿を見た時に、どんなに喜んだか知れない。母は、私が小学校へ入学したとき、こんな話をした。

「あんたは、岡山のおばちゃんによくしつけてもらって、神様に手を合わすことは、よくできているけれども、手を合わせているだけで、何もお願いしておらんやろ？ 今日からは、『神様、どうぞ、世のため、人のため、家のためにお役に立つ人にならせて下さい』と、お願いしなさい。」

それからは、毎日、起床、就寝、登校、下校の度に、神前に向かって手を合わせ、このことを祈ることになった。

母は、時折、「どうしたら、世の中のお役に立てるか、考えなさい。」と言

って、祈るだけでなく、自ら考え、求めるよう促した。

私は、母から離れて育ったために、母が家に居る時には、何となく、母のそばに居たかった。ある時、母は、漬物を漬けるために、たわしでゴシゴシとこすって、樽を洗っていた。私は、そばで、ぼんやりと見ていた。

母は、せつせと手を動かしながら、こんな話をしてくれた。

「これはなあ、"亀の子たわし"と云うてなあ。これが発明されたお蔭で、どんなに沢山の人が、助かっているか知れへんのや。酒屋さんも、漬物屋さんも、樽を洗うのは大変な仕事や。このたわしが発明される前は、藁束を手につかんで、ゴシゴシとこすったんや。藁束では、亀の子たわしのように、汚れが落ちん。そやから、亀の子たわしのお蔭で、何万人の人が助かっているか知れんのや。そやけどなあ、この亀の子たわしを発明した人の名前を知っている人は、ほとんどおらんやろ。」

世の中のお役に立つということとはな
あ、有名になるということは、違ふ。

名前だけ知られたって、何にもならん。
名前は知られんでも、この亀の子たわ
しのように、何千何万の人のお役に立
つことの方が、ずうつと大切や。」

この話は、私の心の中に、深く刻み
込まれた。この後、わずか六年で、母は、
この世を去った。

伯母は、私の心の中に、信心の芽を

育ててくれたし、母は、高い志を持つ
て生きることを教えてくれた。

信心の継承について、「自分が、し
っかり信心しておれば、神様が、何と
かうまく取り計らって下さるだろう。」
と、いう人もあるだろうが、私は、決
してそうは思わない。子供のその時そ
の時の年齢に応じて、適切な努力を重
ねていかなければ、親としての責任が
果たせていないことになるし、自ら努

力すべきことを放棄して、神様まかせ
にしたのでは、神様を用人扱いして
いることになって、御無礼であり、「神
も助かり、氏子も立ち行く」という道
が立たなくなる。

伯母や母から、素晴らしい教育を受
けたと同時に、今、親として、振り返
った時に、良いお手本を示して下さつ
たことに、深く感謝している。

(さらさや主宰)

W・モーリスの壁紙と芹沢銈介の染紙のこと

志賀 直邦

先日、たくみと縁の深かった山本正
三氏のご家族から、所蔵されていたウ
イリアム・モーリス(一八三四〜一八
九五)の壁紙と、芹沢銈介(一八九五
〜一九八四)の染紙をいただいた。山
本さんは戦後のたくみの再開に協力し、
三十一年末ごろまでの十年ほどを役員
として活躍された。とくに愛媛の砥部
焼や、黄八丈、阿波しじらなどの織物の

再興に努めるなど、戦後の民藝の復興
に忘れることのできない一人であった。
それともうひとつ、芹沢作の染紙の
仕事とのかかわりも特筆される。芹沢
先生の、合羽^{かつは}刷り^ずや型染めの手法によ
る和紙染めの仕事は、昭和十二年
(一九三七)から十六年にかけて「和
そめ絵がたり」や「絵本どんきほう
て」「法然上人絵伝」など、芹沢本物

語絵として高い評価をうけた一連の作
品群を生み出したのであった。

そしてさらに二十年十二月、芹沢に
よる和紙染めの普及版、型染カレン
ダーが山本正三の発案によって誕生し
た。この芹沢版カレンダーは、こんに
ちまでほぼ六十年にわたって、海外も
含めて幅広い愛好者をもっている。

じつはその発端は当時の進駐軍、と
くに米英の軍人の家族たちが、母国へ
贈るクリスマス・ギフトに適当な品が
ないということで、柳宗悦(一八八九

（一九六一）先生に相談したことによるらしい。

カレンダーの好評によって、その後クリスマス・カードや、芹沢凶案の染紙を用いたテールブルマットやアルバムなどが制作され、それらのヴァリエーションも多岐にわたった。

とりわけ総柄の中版型染紙は、和紙を用いた加工小物だけでなく、芹沢本来の、着尺、帯や卓布などにもその柄が転用され、愛好された。

そしてその技術の伝承と量産のために、三十年（一九九五）、蒲田に工房として「芹沢染紙研究所」が設立された。今回たくみで展示される中版の染紙はその当時制作されたもので、オリジナルといっている。

それらの柄は、松竹梅を散りばめたつなぎ紋や、紅型模様、根曲がり竹紋、小紋柄などで、その色彩と連続模様の美しさは、古更紗や琉球の紅型に比べても遜色がない。

ところで芹沢銈介がはじめて柳宗悦

の民藝美論に触れたのは、昭和二年の春、朝鮮京城の朝鮮民族美術館、慶州の佛国寺への旅の際であった。このとき往路の船中で、彼は雑誌「大調和」に連載の柳の論文「工藝の道」に感銘を受け生涯の転機となったという。

この「工藝の道」が「ぐろりあささえて」から単行本として出版されたのは昭和三年（一九二八）であった。そのころ、関東大震災と大正バブルの崩壊によって時代は転換期にあった。雑誌「白樺」の読者であり、そのヒューマニズム思想の影響を強く受けた多くの青年が、「工藝の道」を読んで自らの行くべき道に目覚めたのであった。芹沢だけでなく、それらの青年たちの多くがその後民藝運動に参加した。

柳は「工藝の道」に先立つ論稿「工藝の協団に関する一提案」のなかで次のように書いている。

“多くの新たな喜びを得ている。”

“美を味う喜び、これは今の時代に特に与えられ許された恩寵であるといっている。だが私達は古作品を味うと同時に、新しく作るといふ任務をおびている。”とのべ、さらに

“いかにして知識的な個人的作者たる吾々が、あの古作品に見らるるような、自然な無心な美を産むことが出来るか、“そう問い、柳は、

“私は希望を棄てない一人である。”と明言する。柳は、まことの工藝に達する道、あるいは三つの段階として

一、修業による自力道
二、帰依による他力道
三、協団による相愛道

この三つを示している。柳は、正しい美しさの性格がもつとも工藝にあふれていた時代、ヨーロッパでいえば中世のギルドの組織、日本では協業や分業によるもの造りのあり方を理想とし、そうした協団による制作への提案をしたのであった。

民藝運動の実践についての、このよ
うな柳の考えは、彼自身も述べている
ように、柳に先駆するラスキンやウイ
リアム・モーリスの思想や運動から示
唆を得たものでもあった。

ラスキンやモーリスの時代、十九世
紀の半ばから後半にかけて、産業革命
の功罪が社会的矛盾として尖锐化し、
マルクスやラスキンの社会主義思想
が、人類の未来についての、とりわけ、
近代に失われてしまった労働の悦び
と、社会的平等の回復への希望として、
注目されはじめたのであった。

モーリスもまた社会主義者同盟や
アーツ・アンド・クラフツの活動など
をとおして、日常の生活の中の美を生
むには手仕事によること、そしてそれ
は、正しい社会においてしか実現しな
いことを説いた。だが彼らの仕事も時
代の制約を超えることはできなかった。
ところで冒頭に紹介した山本正三
は、柳とモーリスの関係について強い
関心をもち、のちに『ウイリアム・モー

リスのこと」という論稿にまとめ、東京
民藝協会の機関誌「民芸手帖」に発
表している。(のちに相模書房から出版)

山本は晩年、モーリス研究の完結の
ためにイギリス行きを切望しながら、
病を得てついに果たせなかった。そし
て、ロンドンにモーリスの壁紙を注文
したが、その一部が今展示の壁紙で
ある。もとよりモーリスの仕事の全体
をうかがい知るには余りにも少ない資
料ではある。それにモーリスの壁紙の
デザインそのものについては、柳は高
い評価を与えていない。だが、柳はモー
リスたちの真摯な志については「工
藝美論の先駆者に就いて」という文
章の中で、次のように書いている。

“工藝の諸問題の渦中に私自らを投
じた今日、私はラスキンとモーリスと
がよくもかく迄に工藝を愛し、考え、
且つ行おうとしてくれたかに感激の情
を禁ずる事が出来ぬ。だが後に来るも
のは、時代の恵みによつて更に前に進
む。”と。

あとがき

先月の十七日、品川正治さんの講演を
聞いた。「戦争と平和、人間と経済」とい
うテーマであった。品川さんはいま日本
民藝館の監事で、小林陽太郎現館長とは
かつて経済同友会の正、副代表幹事とし
て双璧をなした。その品川氏の憲法九条
を考える講演会であった。

氏は京都の旧制三校二年、自己の思想
形成の大切な時期に徴兵され、中国戦線
の戦闘部隊に配属された。一九四四年の
ことである。その時の体験から、品川さ
んは平和憲法の大切さを知る。

氏は平和を守るためには、国の経済は
抑制されたものでなければいけないと、
市場経済至上主義を排する。さらに平和
憲法を変えない、と国民が決めれば、そ
れは世界を動かすことができるのだと熱
く語られた。(S)

発行 株式会社たくみ

東京都中央区銀座八ー四ー二

発行責任者 志賀直邦

電話 〇三ー三五七ー二〇一七

FAX 〇三ー三五七ー二一六九

振替 〇〇一ー〇一三五六五九

定価 六〇円(税込)